

装置としての「仮面」と三島由紀夫の戦略：『仮面の告白』を中心に

龍, 文威
上海外国語大学：博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/7318873>

出版情報：九大日文．44，pp.2-14，2024-10-01．九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：



装置としての「仮面」と三島由紀夫の戦略

——『仮面の告白』を中心に——

龍文威

一、はじめに

三島由紀夫の『仮面の告白』は1946年7月に刊行された後、当時の日本文壇の文芸評論家たちによって熱く論じられ、現在でも三島の出世作および代表作の一つとして評価されている。『仮面の告白』は、男性に性的欲望を覚え、性意識に悩み込んでいる「私」の成長を描いたため、今では同性愛小説として位置づけられているが、伊藤氏貴も「文学において『同性愛者』をはじめ受けたのは、三島由紀夫の『仮面の告白』（一九四九年）である。同性愛に関するものとして、近代文学から選ぶとすればまず間違いなく誰もが筆頭に挙げるであろう作品だ」⁽¹⁾と主張している。にもかかわらず、刊行当初の論評を振り返ってみると、同性愛モチーフに言及したものは基本的になかったことが分かる。そのような史実を踏まえて、武内佳代は『仮面の告白』の刊行当初、「文芸評論家たちはその同性愛モチーフに一様に無関心であり、一方で、一般読者のなかには好

奇心を抱くものも少なくなかった。この相反する反応の共存には、当時の同性愛言説の少なさや異性愛イデオロギーの浸透が背景としてある。」⁽²⁾と指摘したうえで、「近代日本の本格的な同性愛小説という『仮面の告白』の文学表象が、実際は50年代の『禁色』の文学表象から遡及的に再生産されたものである」⁽³⁾という結論にたどり着いている。

つまり、武内佳代は『仮面の告白』の刊行当時の歴史コンテキストと同性愛言説の現場に立ち戻り、『仮面の告白』が日本近代初の同性愛小説として正典化されてきた過程と変容を整理し、その生成の歴史性を浮き彫りにすることによって、その言説の自明性を覆そうとしている。言い換えれば、武内佳代は『仮面の告白』というテキストにとどまらず、それをめぐる社会・文化的事情、特に同性愛認識にまで視野を広げつつ、これまで定説となつた『仮面の告白』論を見直そうとしている。

武内佳代の先行研究としての価値を大いに認めつつ、なお、やや不満に思えたところがいくつもあつたのは確かである。一つは、確かに刊行当初の社会事情と同性愛言説は『仮面の告白』への認識モードをある程度決めたのは事実であるが、読む（受信者）側だけでなく、書く側（発信者）の三島由紀夫にも目を向けなければならぬと思う。つまり、『仮面の告白』をめぐる言説化とその変容に、作者の三島由紀夫は何の役割を果たしてきたかを究明することが必要であると思う。つまり、作者、評論家、読者をお互いに影響しあうもの同士として見れば、その言説の生成メカニズムの究明に繋がる新発見があるはずであ

る。二つ目は、『仮面の告白』という小説の外部にとどまらず、小説の内部にその語り、構造、表現にも視野を広げ、そこから外部による影響を見極めることも必要であると思う。

従って、武内佳代の論文を踏まえつつも、なお、それを以上の二つの方向性で乗り越える形でアプローチを試みたい。具体的に言えば、『仮面の告白』における「仮面」という装置を手掛かりに、同時代の同性愛言説が如何に『仮面の告白』の創作アイディア、内容、特にその「仮面」と「告白」の装置性を制約・規定したかを探り当てるとともに、如何に同時代の同性愛言説を逆手に利用し、創作ノートなどの公開で文壇の評論、読者の反応などを自分に有利な方向に誘導し、同時代の同性愛表象乃至言説に積極的に関与し、一種の共犯関係を結んだというプロセスを明らかにしたい。

続いて、『仮面の告白』における「仮面」＋「告白」という二重装置の機能を検証したうえで、広告文、創作ノートなどの発表といった外部への積極的な発信を利用して、読者の解説パターンを誘導したりして、『仮面の告白』論の生成に働きかける三島の作戦を明らかにしていく。

二、『仮面の告白』の同性愛モチーフの必然性

三島由紀夫自身は『仮面の告白』について、『私の遍歴時代』で「この小説を書いたときの私の意気込みたるや大変で、最長九枚、最短一枚の、十八種類にわたる序文を書き、とどのつま

りは、たうとう序文はつけないことにしてしまつた。」⁽⁴⁾と述べている。結局序文はつけられないことになつたが、そのうちに唯一発見・公表されたものがあるようだ。「仮面の告白」というタイトルが付された序文表紙には、ドイツ語で *das sonderbare Geschlechtsleben eines Mannes* (男の異常な性生活) 、*das ungewöhnliche* (稀な) 、*überspannte* (極端な) 、*seltene* (奇妙な) 、*sonderbare* (風変わりな) 、*exzentrische* (偏奇な) といった執拗な言葉が書かれている。この公表された序文は、三島由紀夫の同性愛モチーフの選択意図を明確にしている。すなわち三島由紀夫は、日本にも外国にも類の少ない性倒錯の赤裸々な告白的記述で、読者の好奇心を誘う戦略として、当時において猟奇的だと思われる同性愛をモチーフとして選択したのである。言い換えれば、三島は文学的成功を収められるように積極的に同性愛を『仮面の告白』のモチーフにしたのである。

積極的に同性愛モチーフを『仮面の告白』に導入したと言いつつも、三島はやむを得ずこの初めての書き下ろしで「同性愛」を書いてしまったとも思える。三島は、戦争中そして戦後しばらくの間、自分の文学の源泉であつた自分の妄想や欲望を抑圧することによって、かえってふつふつと湧き上がつて来た芸術的、文学的なエネルギーがもう湧き上がらないことを知つた。三島はもう文学者でも芸術者でもなく、たとえ小説を書き続けてもそれはレース編みのような手工芸、それも偽物の模造品しか作れないだろうという深い絶望に襲われている。三島は、今までは真の自我を持たない偽芸術家に過ぎなかつたと思ひ込

み、なんでも良い自分の中に本物の文学の源泉とするモチーフはないか、是非とも書かずにはいられないテーマはないかと振り返った時に、残された文学的必然性として今まで懸命に秘密にしてきたテーマが浮かび上がって来たのである。それは、『仮面の告白』の「同性愛」モチーフなのである。「同性愛」は、普通の男性とは違うあまり他人には言いたくない秘密であつたろうが、今やそれを表現する以外に、文学者としての独自性はない、いや文学者としてそれを表現せずにはいられない、ギリギリの場所に追い詰められていた。『仮面の告白』でやむを得ず「同性愛」を書いてしまった三島由紀夫について、奥野健男は「もつとも人に知られたくないことを書くだけが、もつとも願っている独自の文学者への活路である」⁽⁵⁾と論じている。

居場所が失われた当時の日本文壇で文学的成功を収めるために、三島由紀夫は戦略として「同性愛」を『仮面の告白』のモチーフにした。それは三島が作者としての猟奇的なテーマで当時の日本読者の好奇心を誘う積極的な作戦でもあれば、やむを得ず自分の必死に隠していた秘密を表現するしかないという窮境に陥つたことでもある。つまり、自分の性的秘密を文学の武器に転化するやむを得ない作戦である。そのために「生まれて初めての私小説」に挑戦したのであるが、「私小説」という彼の言い方には最大限に記述の真実さと正確さを求める意味がある。三島にとっては、正確に書くことは自他のセクシュアリティを感覚から認識に移行させる作業であり、書くことでセクシュアリティが規定しなおされることになる。これは、次の事

実にも繋がっているとと思われるが、自分の同性愛的な、或いは自虐的な性向が何に起因しているかという疑問を解きたい衝動に駆られて、『仮面の告白』を発表する半年ほど前に、三島は『性と生活』を書いた性心理学者の望月衛を訪ねて、いろいろアドバイスをもらつて、ヒルシュフェルトの原著『性の病理学』も借りて読んだことがある⁽⁶⁾。これは『仮面の告白』に散らばっているマグヌス・ヒルシュフェルト、クラフト・エビングといったヨーロッパの性科学者への言及によつても裏付けられる。猪瀬直樹によると、『性の病理学』には三島の家庭環境と瓜二つの事例が載つてあり、同性愛的傾向のある学生から父親宛の手紙には「仮面」という言葉が幾度も出てきたので、「いかなる他人の前でもまとわなければならない鉄の仮面」を外して「生まれてこのかたの私のあるがままの姿、つまり同性愛の男としての自分を晒らしております」という訴えにヒントをもらつて、その学生の姿に同じ仮面を被っている自分の姿を重ねて見たという⁽⁷⁾。これまで同性に性的欲望を感じながらも、それを抑えて、異性を愛しているふりをしなければならぬ自分は「仮面」の人生を送っているのではないかと思つただろうから、異性愛者を偽つてふるまう自分の性的関歴をありのままさらすことを「仮面の告白」と言っているのではないかと思われる。

でも、『仮面の告白』は単なる性的秘密を打ち明けることを意味しているのかというと、そうでもないと思われる。「仮面」はむしろ一種の重大な意味を持つ装置として機能しているように思えてならない。以下、『仮面の告白』における「仮面」の

装置性にアプローチを試みたい。

三、『仮面の告白』における「仮面」という装置

三島にとつては、これまで同性への性的欲望を必死に隠し、異性への欲望を偽るふるまいをしているのは本当の自分ではなく、むしろ自分の仮面なら、それを素直に告白するのは一種の懺悔にもなるし、最終的に自分のセクシュアリティを「同性愛」に規定してしまうことにもなる。しかし、同時代的な同性愛言説としては、近世男色コードと西洋科学の変態性欲コードというふたつのコードがあるが、望月衛を通して西洋の同性愛概念を知った三島は自分を病的な変態コードに規定してしまつて、だからずつと思ひ悩んでいるのである。三島は戦後日本文壇に新たな定着が急がれる時期に河出書房から書き下ろしの依頼を受けて、文壇における居場所の確立と自分の性意識の整理という二つの目的をもって『仮面の告白』にとりかかったのであるが、猟奇的な「同性愛」モチーフを通じて自分の特異なセクシュアリティを大衆に晒すのは読者の好奇心を煽り、文壇の名声を獲得するために、確かに効果的な作戦であったが、同時に変態性欲者の身分がばれてしまい、極端になれば、彼の実生活に計り知れない悪影響を及ぼすリスクも大いにあると言つて過言ではない。

そのリスクから自分を守るために、三島は最大限に「仮面」を生かし、「仮面」を特別な「装置」として機能させた。結論

を先に言つてしまえば、「仮面」という装置は三島の実生活と文学における重要な構成部分であるといつてよく、「仮面」という装置を生かして三島が文学の功名を得たと同時に、自分の実生活が過度に影響を受ける危険を回避することもできたと思われる。

では、以下にこの「仮面」という装置について深く検討していく。

まず、『仮面の告白』という書名から始めよう。『仮面の告白』は二重の意味を有していると思われる。一つは「これまでの仮面を被りながら生きてきた人生を告白する」ことであるが、一方、「仮面を被つて告白する」ということにもなる。「仮面を被りながら生きてきたこれまでの人生を告白する」というのは、自分の正体を露わにして本当の自己認識と自我覚醒に達成できることを目指している。これは『仮面の告白』で自分の今までの性意識を整理したいという三島由紀夫の目的に合致している。一方、「仮面を被つて告白する」というのは、仮面をかぶせることを前提にしなくてはいけないので、その告白にはもちろん嘘と虚構が伴っている。結局、「仮面」の虚偽性と「告白」に必要な真実性が一種のパラドックスになり、「仮面」をかぶせての告白は、虚偽性を帯びつつ真実性も有しており、すなわち両面性を持つていることになる。このような「仮面」の虚偽性と「告白」の真実性の融合はまさに『仮面の告白』という三島由紀夫の小説の本質をよく表している。

この小説は「告白」でありながら、「仮面」を被つてのもの

であるために、フィクションなる告白だと理解されても当たり前である。それと同時に様々な回想や噂などから、ある部分は事実と見なせるのではないかと言う予想もあった。むろん、この小説が過去の再編である限り、書かれたことを事実と呼ぶのは粗雑の誹りを免れない。しかし、自分の経歴や、家族関係を忠実になぞり、今日判明した三島由紀夫のセクシュアリティと照らし合わせて齟齬のない「倒錯とサーディズム」が記述されていることからすれば、過去の再編に伴う隠蔽や虚構化は極小

なことにとどまっていると思われる。例えば、主人公の生年月日、従妹から呼ばれる「公ちゃん」、家族、住居、学校、兵役などいずれも三島の年譜に合致している。聖セバスチャンに関する散文詩もその断片が三島由紀夫文学館で発見されている。園子との再会の場面も実際にあったことで、昭和21年のノートに、その場を再現する記述があり、ほとんどそのまま『仮面の告白』に生かされている。こうしてみれば、ますます『仮面の告白』の主人公と三島との同一性が証明されてきて、『仮面の告白』の私小説性が裏付けられているようであるが、同一性が証明しきれものではないのももちろんのことである。三島由紀夫自身も「『仮面の告白』ノート」(書き下ろし長編小説『仮面の告白』月報、河出書房、昭和24年7月)で「告白とはいひながら、この小説のなかで私は「嘘」を放し飼にした。好きなところで、そいつらに草を喰はせる。すると嘘たちは満腹し、「真実」の野菜畑を荒らさないやうになる。同じ意味で、肉にまで喰ひ入った仮面、肉づきの仮面だけが告白をすることができる。告白

の本質は「告白不可能だ」といふことだ」⁽⁸⁾とも書いている。こうして見ると、三島由紀夫はこの初の書き下ろしに書名を付ける時に、すでに色々工夫して多様な読みの可能性をもたせようように『仮面の告白』にしたのではないかと思われる。

上述したように、近年の資料発見に伴ってわかったことであるが、『仮面の告白』の主人公と三島の同一性がほぼ証明され、その記述も三島の実生活と重なっている。そして式場竜三郎宛ての書簡(昭和24年7月19日)では、「『仮面の告白』」に書かれなかったことは、モデルの修正、二人の人物の一人物への融合、などを除きましては、凡て私自身の体験から出た事実の忠実な繰述でございませう⁽⁹⁾と三島自分も明言している。その事実性の強調に対して、同じ昭和24年7月に発表した「仮面の告白」ノート⁽¹⁰⁾となると、三島が事実性よりもこの小説のなかの「嘘」をわざわざ強調して、その虚構性をクロージアップさせているのは何故だろうか。

なお、『仮面の告白』の創作・刊行前後に三島由紀夫が書いた一連の書簡や広告文などを結び付けて考えると、この小説をめぐる三島由紀夫の言い方には微妙な違い、乃至明らかなずれがあることが分かる。もちろん、これは『仮面の告白』という小説自身の複雑さ、「仮面」の持つ装置性にも関係するが、三島自身の考え方の微妙な動揺にも連動していると思われる。さらに言えば、そこに三島由紀夫の戦略も潜んでいると見てよからう。以下、三島の戦略を具体的に考察していきたい。

四、『仮面の告白』の解説パターンと三島由紀夫の戦略

三島由紀夫の戦略は『仮面の告白』刊行前後に発表した広告文と創作ノートに一番はつきり現れているのではないかと思われる。例えば、読者向けに発表した広告文としての「作者の言葉（『仮面の告白』）」（1966年1月）と「仮面の告白」ノート（1966年7月）は作者自身の創作談であるが、明らかに読者への発信に重きを置いているので、読者の作品解説に積極的に関与し、乃至読者の解説を自分に有利なほうへ誘導する狙いがあると思われる。

例えば、1966年11月に、坂本宛書簡で三島由紀夫は「今度の小説、生まれてはじめての私小説で、もちろん文壇的私小説ではなく、今まで仮想の人物に対して鋭い心理分析の刃を自分に向けて、自分で自分の生体解剖をしようといふ試みで」⁽¹⁰⁾と書いている。また、1966年1月13日に刊行前の広告文として「作者の言葉（『仮面の告白』）」で三島由紀夫は『仮面の告白』という小説は「能ふかぎり正確さを期した性的自伝である」⁽¹¹⁾と明らかに説明している。「生まれてはじめての私小説」と「正確さを期した性的自伝」はいずれも自分の隠してきた性的秘密と欲望をありのままに、つまり嘘なしに記録することを意味しているだろう。周知のとおり、所謂私小説は自己の生活体験とその間の心境や感慨を吐露していく小説として、いつも作者自身とわかる人物が「私」として作中に登場し、「私」の生活や

想念、目撃見聞した出来事を虚構を交えずありのまま語ったとみなされている。つまり登場人物はほとんど作者自身であることが特色である。それを考えれば、三島は『仮面の告白』を私小説或いは自伝と位置づけたのではなく、『仮面の告白』の主人公の「私」作者本人という読みのパターンも当時の読者に提供したことになる。私小説の伝統を持っている日本では、語り手の「私」作者の方がもっと作品の真实性を保証できて、親しみやすいという考えがあるため、三島は積極的に主人公の「私」作者本人の異常性欲の暴露小説という名目を持ち出し、読者の覗き趣味を煽り立て、その「同性愛」モチーフに目を向けさせたかったのであろう。

「自己分析による倒錯とサーデイズム」⁽¹²⁾を含んだ「同性愛」モチーフ、また私小説・自伝的な真実さを売り物にして読み手の好奇心を煽り立てるような解説パターンは、まさに前文で述べた「変態性欲コード」に近いのではないかと思われるが、注意すべきなのは「能ふかぎり正確さを期した性的自伝である」の前に「この小説は、私の『セク・セクスアリス』であり」⁽¹³⁾ともはつきり言っていることである。周知のとおり、『セク・セクスアリス』は、森鷗外の小説で、1906年（明治42年）に発表された。題名はラテン語で性欲的生活を意味する *vita sexualis* で、鷗外作品では異色とされる。主人公の哲学者・金井湛が、高等学校を卒業する長男への性教育のための資料として、自らの性欲的体験についてその歴史をつづる内容である。その「性

欲の歴史」の中で、「僕」、すなわち金井がかつて所属していた、明治一〇年代の男子学生集団の「男色」が語られる。この小説では、硬派（少年を嗜好する集団）は少数派であるのに、学生集団では「硬派たるが書生の本色」ととらえられており、「硬派」は異端視されるどころか、正統なものと見なされており、「正常」になるためには、精神医学においては「異常」なものである同性愛を原動力とした絆を通過することが不可欠だと語り手の金井が主張している。このような、「女色」を「墮落」の元凶と位置づけ、それゆえに「男色」を正当化する見解は『キタ・セクスアリス』だけに見られるものではない。そのため、近代日本の男性同性愛の歴史に取り組んだ、古川誠「セクシュアリティの変容——近代日本の同性愛をめぐる三つのコード」や、グレゴリー・フルーグフェルター「欲望の地図作製法——一六〇〇年から一九五〇年までの日本の言説における男同士のセクシュアリティ」、前川直哉「明治期における学生男色イメージの変容——女学生の登場に注目して」でも、『キタ・セクスアリス』の男色表象は明治初期の男性同性愛を語る際の手がかりになっている。つまり、『キタ・セクスアリス』は近世男色コードの典型として学者の注目を集め、一般読者にも広く読まれている。三島由紀夫は『仮面の告白』をまず「私の『キタ・セクスアリス』と位置づけ、なおその解釈として「正確さを期した性的自伝」とつけ加え、さらにこの性的自伝の内容を「自己分析による倒錯とサーディズム」と規定している。「倒錯とサーディズム」は明らかに西洋変態性欲モードによる解説パター

ーンであるが、『キタ・セクスアリス』は明らかに近世男色コードによる解説パターンである。つまり、三島はここで同時に二つの解説パターンを提示している。変態性欲モードは同性への欲望を病として見ており、同性愛についての知識がごく乏しい時代には十分好奇心を誘えるものであるが、それに対して、近世男色コードはその異常性欲を思春期の通過儀礼と見て本当の異常でないことを主張するものである。『仮面の告白』をめぐる三島の二種類の解説パターンは同時代的同性愛言説の混在と交錯を反映させるもので、その影に身を置いている三島由紀夫自身の精神的「揺らぎ」も見られなくはないが、前述したように、『仮面の告白』執筆前後、丁度、三島は性心理学者望月衛から西洋性心理学の知識などを学んで、自分のセクシュアリティを西洋変態性欲コードに整理しようと考えたところでもある。では、なぜ三島はこの広告文でわざわざ『仮面の告白』を自分の戦後版『キタ・セクスアリス』とアピールしたのだろうか。そこには三島の戦略が隠されていると指摘したい。先述したように、近世男色コードの同性愛言説では、男色はその人間の行為あるいは趣味嗜好であって、その人間が何者かということではなかった。言い換えれば、「男色」はその人間を定義するアイデンティティでなかったのである。そのため、1950年代以降も川端康成の『少年』や、堀辰雄の『燃ゆる頬』のような作品では、男たちは互いの愛情を表現するのに何等の羞恥も恐れもなかったのである。突っ込んでいえば、三島由紀夫は変態性欲コードで読者の好奇心を狙っていると同時に、『キタ・セ

クスアリス」の系譜にあるものとして読みたい気持ちもある。つまり、小説にある異常欲望は確かに自分のありのままのものであるが、それはセクシュアリティを決めてしまうアイデンティティではないことを暗示し、社会の同性愛差別から自分を守る予防措置を取っておいたといつてよい。更に言えば、これまでの「仮面」生活の告白をすることによって自分の素顔を凝視するといつても、そのために、また新たな「仮面」を被つておかないとできないことを意味する。そこには三島における装置としての「仮面」のメカニズムがあるのではないかと指摘したい。言いかえれば、三島は積極的に近世男色コードの読みパターンを読者に提示することによって、変態性欲コードの読みパターンにある程度歯止めをかけておいたということである。

これに関連して、先にも言及した1959年7月に発表した「『仮面の告白』ノート」を考えあわせれば、三島の戦略性が一層はつきりしてくる。半年前(1958年1月)の広告文「作者の言葉」ではあれほど小説の正確さ、自伝性(私小説性)を強調してきたが、半年後の出版月報に公開されている「『仮面の告白』ノート」になると、この小説の事実性よりもこの小説のなかの「嘘」をわざわざ強調して、その虚構性をクローズアップさせている。これは『仮面の告白』という小説の複雑さをアプルーする狙いもあるが、それよりも読者向けの戦略と理解できないわけではない。つまり、これまでの宣伝では自伝性、事実性を強調しすぎて、語り手の「私」＝作者と読まれるリスクがある。そのリスクを避けるために、三島は、虚構の多いこの小説はいくら真

実そうに見えても、実は嘘が多いと主張している。だから、主人公の「私」が作者に近いが、作者その人ではないと強く言わずにはいられない。その延長線で次の発言が出て来るのも当たり前のことである。

多くの作家が、それぞれ彼自身の「若き日の芸術家の自画像」を書いた。私がこの小説を書こうとしたのは、その反対の欲求からである。この小説では、「書く人」としての私が完全に捨象される。作家は作中に登場しない。しかしここに書かれたやうな生活は、芸術の支柱がなかつたら、またたくひまに崩壊する性質のものである。従つてこの小説の中の凡てが事実にもとづいてゐるとしても、芸術家としての生活が書かれてゐない以上、すべては完全な仮構であり、存在しえないものである。私は完全な告白のフィクションを創らうと考えた。「仮面の告白」といふ題にはさういふ意味も含めてゐる。⁽¹⁴⁾

「すべては完全な仮構であり、存在しえないものである。私は完全な告白のフィクションを創らうと考えた」といった記述は、明らかに半年前の広告文と異なっている。なお、同じ7月に式場竜三郎宛ての書簡には「凡て私自身の体験から出た事実の縷述でございます」という記述がこれとも違っている。こうしてみれば、違う時間はもちろん、たとえ同じ時期にしても、個人向けの書簡と一般読者向けの宣伝文との違いによって、三

島由紀夫は異なる情報を発信している。これは意識的な戦略ではなくてなんだろうか。なぜ『仮面の告白』における虚構性を強調したのかといえ、その次の記述を導き出すためであろう。

「書く人」としての私が完全に捨象される」「作家は作中に登場しない」というのが三島の一番主張したいポイントではないかと思われる。つまり、異常性欲の持ち主である主人公は作者ではないことを強調し、意識的に作者と主人公である「私」を切り離したのである。従って、『仮面の告白』は「仮面」の秘密を告白するというよりも、「仮面」を被つての告白という意味になる。三島の言葉を借りて言えば、「仮面の告白」という題に含まれている意味は「完全な告白のフィクション」になってしまう。

実は『仮面の告白』で「同性愛」モチーフを借りて自分の性意識を整理しようとした三島由紀夫は、自分は小説の語り手「私」と「誤解」されてしまうことを恐れていたゆえに、作者としての三島由紀夫の「私」と『仮面の告白』の主人公である「私」との関連性をきつぱりと断ち切つて、自分の実生活を守ろうとしたのである。奥野健男に拠れば、「昭和24年頃は今日と違い、ホモセクシュアルやレズビアンなどの同性愛的性欲は社会的に、倫理的にタブーであつた。それを不倫、いや非倫理、異常、罪悪とする倫理的、社会的風潮はきわめて強かつたのである。」⁽¹⁵⁾ そんな時代に同性愛者待っているのはスキャンダルの中での破壊、社会からの抹殺、更には自殺の可能性であろう。そんな社会事情を知っている三島由紀夫が文学的成功を願つて

いると同時に、実生活におけるリスクも最大限に避けようとしているのは狡猾というよりやむを得ないことである。結局、「仮面」を外して、自分の性的秘密を告白しようと思つている三島は再び新たな「仮面」を被らなければならなくなる。

これに関連して、『仮面の告白』刊行前後三島と性心理学者望月衛との接触を思い出したい。前にも述べたように、猪瀬直樹によると、三島は『仮面の告白』執筆時、望月を訪ねて、ドイツ語原文の『性の病理学』を借りて学んだこともある。しかし、望月は「思索」(1949年11月号)に掲載された「性的成熟と社会的成熟——三島由紀夫『仮面の告白』を検討しつつ」において、三島由紀夫との直接関係を隠蔽したうえで、語り手の「私」と作者とを意識的に切り離して論じている。そこに、作品の主人公を一つのケーススタディーとして扱い、議論を一般論の範囲に留めたという心理学者らしい流儀が見られ、三島由紀夫の性的秘密を守りたいという医者配慮も感じられる。つまり、三島の性的秘密を知っている望月も三島と同じように、語り手の「私」と作者を切り離すことを通して、三島を社会からの抹殺と差別から守ろうとしたのであろう。

五、『仮面の告白』刊行後の同時代評と読者反応に見る三島の作戦の効果

『仮面の告白』刊行後の様子を見れば、三島の作戦は確かに効果的であつた。刊行後の同時代評は、作品の出来栄や、問

題性の高さに比して、やや鈍いように思われるが、神西清はいち早く「鋭く逆説的な作品」で、殉教の聖セバスチャンのくだりを「ひろく世界文学を通じても珍しい男性文学（あるひは一そう端的に牡の文学といってもいい）の絶品」⁽¹⁶⁾と絶賛した。

花田清輝は「聖セバスチャンの顔」で、「仮面は、懺悔聴聞償を眼中におき、おのれの顔をかくすためにとりあげられているのではなく、逆におのれの顔をあきらかにするため」⁽¹⁷⁾であったと述べ、この小説を高く評価した。花田清輝の好評の追い風で三島由紀夫の『仮面の告白』は文壇から熱い支持を獲得し、「読売新聞」(1939年12月26日付)の「1939年読売ベスト・スリー」に、九人の選者のうち六人から推薦を受け、選ばれた。三島由紀夫本人も『仮面の告白』で「戦後作家」として華々しくデビューを飾った。急に原稿依頼の注文も急増し、天才だ、若い世代の旗手だという評価がまた聞こえた。

注意すべきなのは、このように続々と文壇から熱い支持を得しながらも、当時の日本文壇の作家や文芸評論家たちが『仮面の告白』の「同性愛」モチーフにはほとんど触れなかったことである。同時代評は『仮面の告白』における同性愛を「異常な性」ではなく、男性の成長過程における健全なセクシュアリティと見なすことによって、それを戦後の新進作家による「牡の文学」と指定したのである。この傾向は「異常心理でもなんでもなくむしろ生理的現象」に過ぎない「倒錯心理」が「二十歳過ぎまで保存されていたというだけ」の「若い季節をつよく感じさせる小説だ」という荒正人の評価などにも見られる。こ

れは明らかに三島の提示しておいた「キタ・セクスアリス」的な解説パターンに当てはまったもので、三島の「キタ・セクスアリス」解説法Ⅱ近世男色コード解説法という作戦の効果をうらづけるものといつてよい。そのため当時急速に成長しつつあったマスコミも三島の『仮面の告白』の同性愛をスキャンダルとして取り上げることを避けた。『仮面の告白』の仮面という言葉が、魔力を発揮したのかもしれない。三島が心配した事態は起こらなかった。そして文芸雑誌の力作作品論によって、文学的このみ次第に強く、高く評価されるようにいったたのである」⁽¹⁸⁾。三島にとつて、幸いなことに、ここまで裸の姿を告白して、はじめて文壇有力な文学者を感銘させ得たが、かれらはこれを徹底した私小説として評価したのではない。むしろ一つの観念小説、ナルシストの幻想としてその新しい文学性を深読みしてくれている。つまり、私小説的な正確さがあるが、虚構もないわけではない、もつと肝心なことに主人公は作者の三島ではない。だから私小説として評価していいのでない。結果的に見れば、凡ては三島の希望通りで、三島の仕掛けた軌道に乗っている。端的に言えば、三島の作戦は大成した。

文壇は以上述べたような反応だったが、一般読者のほうはどうだったろうか。むしろ好奇心乃至覗き趣味で『仮面の告白』を読む人が多かった。つまり変態性欲コードで読む傾向が強かった。なお、佐藤秀明によれば、『仮面の告白』を読んで、やつと三島の「本音が知れたという安心がある」ということで、三島の言う「生まれてはじめての私小説」という目論見を収め

たのである。⁽⁹⁾ここから文壇と一般読者の反響に大きなずれ、乃至拮抗があることが分かる。ところが、その一方で昭和25年2月の「芸術新潮」に無署名の次のような批評が載った。

この肉体と愛情の分裂といふ悲劇がこの小説の筋である。しかし読者にとつて面白いのは、主人公がさういふ心理の倒錯から必然に得て来る価値転換で、戦争や人間関係や、社会現象を、悉く逆に裏から見るとなる所である。価値がすべてそこでは転換し、不思議な逆認識の美といふやうなものがこの作品の各行に充満してゐることである。⁽²⁰⁾

ここには、主人公であり語り手である「私」と作者を切り離し、作品を一個の完結した世界として読もうとする姿勢が見られる。佐藤秀明はこれを「反私小説的」な読解とついている。彼の言い方を借りて言えば、そこに「仮面」の「告白」の「仮面」を意識しつつ、「告白」をフィクションナルに読むという、極めて真つ当な小説の読み方が示されているわけであるが、このフィクション理解が浸透するにつれて、三島の「源」であるセクシュアリティは再び不透明な水面下に沈むことになるのである。⁽²¹⁾

つまり、一旦私小説として読んで、三島の私生活を覗いてみたつもり的一般読者はだんだん姿勢を変えて反私小説的に、言い換えれば、語り手と作者を切り離して、『仮面の告白』を一つのフィクションナル世界として読むようになった。こういう意味では、変態性欲コードによる過度な覗き趣味に歯止めをかけて

おいた三島の戦略がある程度効果を挙げたといつてよからう。『仮面の告白』刊行後の反響について分析する場合は、イルメラ・日地谷＝キルシュネライトの以下の指摘は大変示唆の多いものである。

どちらかといえば、計画的に創作する作家だと言われていた三島由紀夫は、時折、ある作品を書いた自分の意図や、その背景などを、作品成立とほぼ同じ時期に、エッセイや手記などを通して発表することがありました。読者の側も三島のそんな“サービス”を喜んで受け入れたようで、彼がそこで提供した情報は、やがて一般知識となつてしまいます。(中略)言うなれば、作品評価の前提や枠を作者自身が設定するわけで、読者は否応なしに、かれが敷いた軌道の上を走ることになります。(中略)作者自らが提供したそのような情報には、しかし巧妙な罠が仕掛けられており、その罠はやがて目に見えないメカニズムにより自動的に働きはじめ、かなり逆説的な状況を覆い隠してしまいます。⁽²²⁾

イルメラ・日地谷＝キルシュネライトのこの指摘は三島文学全体についての一般論であるが、以上見てきたように、『仮面の告白』をめぐる三島の戦略と文壇・一般読者との反響を考察する場合にも十分当てはまると思われる。戦後版「斗タ・セクスアリス」という文壇の読解パターンと、倒錯とサディズムへ

の好奇心という一般読者の読解パターンは、どちらも三島の敷いた軌道から離脱していない、むしろその軌道に走っているといつてよい。しかし、なぜ三島はほかの軌道ではなく、その二本の軌道を敷いておいたのだろうか。これは一時の思い付きではなく、むしろ自分の同性愛欲望に思い悩んでいる三島が同時代的同性愛言説を十分意識して、いや、単に意識してというよりもそれに制約され、乃至決定された結果である。『仮面の告白』刊行前後に三島は頻繁に書簡、広告文、創作ノートに自分の創作意図を呈示して、なお受け手とタイミングによって、多少違うものを提示するのは、同時代的同性愛言説の混在に敏感に反応し、臨機応変に取った対策でもある。つまり、三島は同時代の同性愛言説を十分に把握したうえで、文学の成功を望むとともに、社会生活での差別と失敗を避けるために同時代の同性愛言説を逆手に利用して、刊行当時の『仮面の告白』論の構築に積極的に関与したと思われる。

以上見てきたように、『仮面の告白』の刊行初期に文芸評論家たちが「同性愛」モチーフに一樣に無関心である現象が現れたのは、武内佳代の指摘した、戦後「男色コード」と「変態性欲コード」という同時代の同性愛言説と、異性愛イデオロギーの台頭と同性愛の周縁化という三つの外部要因のほか、三島由紀夫自身の積極的な誘導によるところも大きかったのである。三島由紀夫は『仮面の告白』を書き、宣伝する際、「仮面」という装置をうまく活用し、臨機応変に二つのコードを取り入れることで自分のために二重保険をかけた。もう少し説明すれば、

こういうことになる。近世男色コードで読まれる場合は、主人公の異常性欲は「二十歳過ぎまで保存されていたというだけ」の「若い季節をつよく感じさせる」ものとして理解されるように、戦後版「キタ・セクスアリス」の読解パターンを提示した。一方、変態性欲コードで読まれる場合は、私小説みたいに真実であるが、虚構もあり、作家は作中に登場しない、語り手は仮面を被った不明な人物と主張して、作者と語り手の「私」を剥離するという非私小説あるいは反私小説的な読解パターンを提示した。どちらも三島にとっては、安全な範囲である。これが二重保険の意味である。

六、結論

『仮面の告白』の創作アイディア、内容、特にその「仮面」と「告白」の装置性は同時代の同性愛言説に制約・規定されたが、一方、三島由紀夫は同時代の同性愛言説を逆手に利用し、創作ノートなどの公開で文壇の評論、読者の反応などを自分の都合のいい方向に誘導し、同時代の同性愛表象乃至言説に積極的に関与し、一種の共犯関係を結んだと思われる。この共犯関係のなかで、三島由紀夫は「仮面」を外したふりをして、なお新たに新しい仮面をかぶせたまま、「変態性欲コード」と「近世男色コード」の間を行き来しているが、決定的な瞬間にまた作者と主人公の「私」を完全に引き離した。このような「仮面」という装置の極致的な運用により、三島由紀夫は文学的成功を

収め、実生活を守ることができたのである。

【注記】

- 1 伊藤氏貴『同性愛文学の系譜——日本近現代文学における LGBT 以前／以後』、勉誠出版、2020年、20頁。
- 2 武内佳代「三島由紀夫『仮面の告白』という表象をめぐる——1950年前後の男性同性愛表象に関する考察——」『F-GENS ジャーナル』(2007年9月)、111頁。
- 3 武内佳代前掲論文、116頁。
- 4 三島由紀夫「私の遍歴時代」『決定版三島由紀夫全集』32巻、新潮社、2003年、303頁。
- 5 奥野健男『三島由紀夫伝説』、新潮社、1993年、211頁。
- 6 猪瀬直樹『ベルソナ三島由紀夫伝』、文芸春秋社、1995年、228頁。
- 7 同上、232～233頁。
- 8 三島由紀夫「仮面の告白」ノート『決定版三島由紀夫全集』27巻、新潮社、2003年、190頁。
- 9 三島由紀夫『決定版三島由紀夫全集』38巻、新潮社、2004年、513頁。
- 10 同上、507頁。
- 11 三島由紀夫「作者の言葉（「仮面の告白」）」『決定版三島由紀夫全集』27巻、新潮社、2003年、176頁。
- 12 同上、176頁。
- 13 同上、176頁。
- 14 三島由紀夫「仮面の告白」ノート『決定版三島由紀夫全集』27巻、新潮社、2003年、191頁。
- 15 奥野健男前掲書、230頁。
- 16 神西清「仮面と告白と——三島由紀夫氏の近作」『人間』(1949年10月)、70頁。
- 17 花田清輝「聖セバスチアンの顔——「仮面の告白」評」、『文芸』(1950年1月)、117頁。
- 18 奥野健男前掲書、230頁。
- 19 佐藤秀明『三島由紀夫 日本の作家100人 人と文学』、勉誠出版、2006年、72頁。
- 20 無署名、無題批評。佐藤秀明前掲書、72頁。『芸術新潮』(1950年2月)に初出。
- 21 佐藤秀明前掲書、72頁。
- 22 イルメラ・日地谷「キルシュネライト」『世界文学を視野にして——三島由紀夫への二つのアプローチ』、井上隆史等編『混沌と抗戦』、水声社、2016年、27～28頁。

(上海外国語大学博士後期課程)